

朝日新聞 DIALOG 主催 U25 セッション

「U25 が考える 2030 年に求められる人材とは？」 第 1 回 講演録

鈴木寛・文部科学大臣補佐官

●はじめに

私は文部科学大臣補佐官や OECD の教育・スキル局アドバイザーなどの職を通じて、様々な教育改革や国際会議に携わってきました。本日は、新学習指導要領と入試改革の意図、ならびに諸々のディスカッションの内容紹介を通じて、今の社会に欠如している点を感じていただきたいと思います。

●21 世紀の社会 300 年ぶりの激動の時代

現在は、思いもよらないリスクと思いもかけないチャンスが訪れている時代だと思います。リスクの一例は水不足や食料問題です。G7 でも議論になったのですが、水資源が世界中で全然足りていません。日本にいとその実感は湧きませんが、日本の水資源が外国企業などに買収されていることは、他国では水資源が乏しいということの裏返しです。これから迎える水や食料不足の危機は深刻です。

都市化・移動化も進展します。人口が 1 千万人を超える都市が、世界各地で急増します。また、人間がどんどん移動し、一つの国だけで学校教育を受け続ける人は減っていきます。例えば、小学校は欧州、中学校は日本、高校はアジアの別の国、といった具合に、転々とするのが往々にしてあると思います。

「教育はドメスティックである」という、従来の概念が変わってしまう時代だからこそ、命の大切さといった、国や文化の違いを超えた、普遍的な価値を共有する学びがより重要になるという議論をしました。

産業革命以来、我々は物質文明をつくってきました。社会資源の大量集積、人工物の大量生産・流通・消費・廃棄という社会を構築してきたわけですが、これではもう立ち行かなくなります。これまでは、人工物を大量生産するにあたり、定型業務・反復作業をそつなくこなせる人材を養成してきました。日本はそれに大成功し、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」として、その名を世界にはせました。

しかし、こうした人間の仕事がどんどんデジタルテクノロジーに置き換わる今

日、「言われたことをやる人間をつくる教育」には意味がなくなる。特に、AIが台頭すると、マニュアルを覚えて高速に正確に再現する力ではなく、問題発見、設定、解決能力が大事になってきます。そこで大事になるのは、幸せを再定義することです。昨今の「Society5.0」は「Industry4.0」の議論とは異なり、幸福論は射程に入っていて評価できますが、まだ、幸福論をめぐる議論が不足しており、新たな幸福論を生み出すべきだと思います。

●過渡期を生きる

亡くなったチェコ共和国のハベル大統領は、「近代社会が終焉しつつあり、今はその過渡期にあると主張していました。何か姿を消しつつあり、何か別のものが生まれつつある。」と語っています。

皆さんは300年続いた近代社会を卒業させる時代を生きていきます。では、どうしたらいいのか。20世紀を代表する米国の文化人類学者、マーガレット・ミードは「強い決意をもった、市民の小さなグループが、世界を変えられるということを絶対に疑ってはならない。実際に世界を変えてきたのは、それしかない」と述べました。これが、次の時代をつくっていく際のヒントになると思います。

●何が綻び、姿を消しつつあるのか？

大衆民主主義、代表制政党政治、選挙制度、官僚制度、学校制度、大工場、スーパーマーケットなどの「マスシステム」は消えると思います。政府広報の「Society5.0」のPR動画で僕が決定的におかしいと思う点は、主人公の高校生が朝起きて、バスで学校に行くところです。その頃はもう、在宅学習の時代ですよ（会場笑い）。週2、3回、仲間と集まって一緒にサッカーをしたり、演劇をしたりすることはあるかもしれませんが、椅子に座って黒板に向かった授業なんかやるのかなあ、と思います。

「代表制」も限界を迎えていると思います。代表取締役が全てのことを知っているわけがないにも関わらず、知っていると擬制して、すべての責任を代表に負わせる制度は崩壊します。

●日本は、どんな社会になるの？

「Industry4.0」や「Society5.0」の議論は、ITに寄りすぎだなと思います。個人的には、生命科学はすごいインパクトがあると思います。「人生100年時代」は現実のものとして到来します。今までは18歳、あるいは22歳の時点

で、60歳まで勤める企業が決まっていたため、それに間に合うように10歳からいろんなことをやる必要がありました。

しかし、100年生きるとなると、再スタートの機会が何度も訪れるため、その都度、学び直しが必要になります。何度でも、いつからでも学べる、となった時、義務教育段階で獲得しておかなければいけないこととは一体、何なのか。30歳や50歳になっても獲得できることは何か。そのあたりをしっかりと見極めることが重要ですね。

また、健康寿命が延びるのは良いことですが、寿命格差が問題になります。現在は、いくらお金とテクノロジーと知性があっても、スティーブ・ジョブは50歳で亡くなってしまいました。

今は、寿命格差があまりないので、国民同士が扶助することでき、同じ国の同胞だと認識できますが、生命科学が進展し、経済力と知力によって寿命格差が拡大すると、同胞意識がなくなる可能性があります。そうなったときに、いかに仲間意識を醸成するかが重要になります。

2030年の国家財政に関しては、利払いなどから予算を組むことが難しくなる可能性を考えておいたほうがいいかもしれません。国民の負担額が増大した場合、国外に出ていく人は出ていくでしょう。そうすると、まさに出ていける人と、出ていけない人の二極化が進みます。

●21世紀の人材と教育

シンギュラリティが到来すると、芸術、歴史学、考古学、哲学、神学など抽象的な概念を整理・創出するための知識が要求される職業、また他者との協調や他者の理解、説得、ネゴシエーション、サービス嗜好性が求められる職業は生き残ると言われています。

そうしたことを背景に、文部科学省は現在、主体的に多様な他者と協働し、課題解決できる力を伸ばそうとしています。「板挟み」や「想定外」の出来事に対応できる能力が、AI時代には大変重要になってきます。プロジェクトに基づく学びは、必ず板挟みの状況が出てくるため、そうした能力の向上が期待できます。

今まではすでに存在する組織にどうやって入れてもらうかを考えてきました。

しかし今後は、幸せをつくるコミュニティや仲間を一から作ることが大事になってきます。幸福の再定義と、協働的に問題解決をはかる力の育成が重要なのです。

●おわりに

マークシート方式の偏重が問題です。人から与えられた選択肢の小さなミスを見つけ、消去法的に正解を選ぶ方式だからです。この減点主義の教育が、成功しても褒められず、ミスしたら炎上する日本の萎縮社会を再生産していると思います。減点を最小化するゲームは終わらせるべきです。潜在的なチャンスを顕在化するために、過度な責任追及ではなく、最善を尽くしたらそれ以上責めない社会を創るため、まさに記述式試験や高校時代のプロジェクト活動の実績を加点主義で評価するAO、推薦方式を評価するような入試に変えていきます。

2018年1月16日 東京大学にて